

# 医芸俳壇



長野 有泉 七種

新潟 中村 雄彦

朝からの狂暑に曇る街の空  
納涼のまづは地酒に頬ひけり  
稻妻の夜こと養ふ棚田かな  
麻服の瘦躯とほとき亡師像  
短命を歎くにあらず蟬時雨

青森 秋霧朝光

会いたくて迎火高くなかく焚く  
灯を消して戻りねぶたの一人笛  
胸に棲む人多かりき花野径  
古き歌ゆるく流れて夜長かな  
彫りすすむ仏師夜長を余さざり

東京 小南丁字

麦わら帽お田植え陛下影涼し  
夏雲や日映い緑五重の塔  
総長の駒場の招宴梅雨夕べ  
俯瞰して花火の競演椅子に列  
蝉しぐれ涼しみ入る神宮路

長野 檜本勝彦  
剣振る一寸法師納涼会  
美顔術夏のあそびの皺を解く  
二輪草踊るリズムに美を撒きぬ  
梅ジユース健康長寿天守照る  
暮鳴いた雌つかまえた水の上

東京 篠田那珈

早わざの古法の姿鶴飼かな  
涼しさや不滅の燈明比叡山  
鈴虫の寺で説法聞き居りて  
トロッコで嵯峨野を下り涼しけり  
シベリヤに行きたし見たし敗戦忌

千葉 秋葉琢磨  
東京 篠田那珈  
避暑の宿冷静に侍す老女中  
旧盆の村はしきたり変らざる  
汗噴かせ無口となりぬ運転士  
夏雲が筑波の嶺を包みたり  
稲穂ゆれ送雷塔は天空に  
裏筑波

東京 初芝澄雄  
オーシンツク声をかぎりに鳴きかわし  
山鳩は背戸山辺り高らかに  
真木の実の甘き味わい舌に染み  
白蓮の実赤々と輝きて  
楠の木の幹真直に天に伸び

川越しに浴衣の見える二階かな  
運動会やる子見る親砂埃  
水濁る変わらず動く蛙の子  
日陰あるベンチに坐り粽食う  
蚯蚓死す紐のごとくになり果てて

兵庫 廣辻逸郎

東京 福神規子

東京 粕木秀穂

辣菴を剥ぐ手休めず母のこと

コオニユリ険しき道に沿ひて立つ

坂陥し夏アキ鶯に導かれ

少年の面影いざこ冷奴

墓のこと語らいて太花火

初潮や渡舟跡とは石ひとつ  
水盤舎の水みなみと今朝の秋

水打ちて土曜の午後の鉄工所

白木槿御典医たりし構へかな

朝顔のこの藍が好き厨窓

病む恋を登りきつたり天道虫

未だ暑き風總身に退院す  
七夕竹入院棟の隅に立つ  
老鶯を聞きし話を聞くベット  
微笑残し妻炎窟を帰りゆく  
病む恋を登りきつたり天道虫

青森 福士盛大

東京 福富清子

廣島 渡辺晋山

羽の折れしどうほうの眼に涙かな

玄関のちろろの命誰が守る

草荒れし売地の空に虫の秋

朝散歩紅に輝く鰯雲

秋刀魚消え漁場を探す男かな

炎帝に立ち向かはんと口紅を濃く  
灯火管制知らず不夜城敗戦忌

B 29 はた蟬時雨耳老ゆる

実盛が兜の藏に大西日

海底は大魚のとぶらひ鰯雲

青森 三上忠英

福富さんの編集部への添え書きから

実盛が兜の藏

芭蕉が「むざんやな甲の下のきりぐす」と詠んだ実盛の兜は、  
自分の出生地の小松市にある太田(ただ)  
八幡神社の藏に納められています。五句  
めは金子みすゞの詩を土台に。



東京 福富 清子

からからと下駄の高鳴る菊日和  
秋晴れや東京ソリー空に伸び  
虫の声聞けば睡魔に襲わる  
炎天や高校球児砂詰めて  
禿頭のずらりと八つ月の宴